

五感を超えて森を読む ——「バタール」の姉妹作としての『野性の呼び声』再読——

小 泉 嘉 輝

はじめに

ジャック・ロンドンと聞けば、犬を物語に登場させた作品を数多く書いたアメリカ人作家だという共通認識があるように思う。その要因として『野性の呼び声』¹⁾ (*The Call of the Wild*, 1903) と『白い牙』 (*White Fang*, 1906) の人気が考えられるだろう。²⁾ しかし、実際のところ、ロンドンのその種の作品は、書かれた時期を見ても、その作品の数を見ても限定的なものである。³⁾ にもかかわらず、『野性』の売り上げ⁴⁾ や先行研究の数⁵⁾ は、他のジャンルの作品に比べて圧倒的に多い。このような状況が「ロンドンは犬の話を書いた作家」という共通認識を形成していると考えられる。

アール・レイバー (Earle Labor) は、ロンドンが持つこのような作家としてのイメージを「ジャック・ロンドンの文学的評価におけるいくつかの皮肉のひとつ」 (“[o]ne of the several ironies of Jack London’s literary reputation”) と主張する (Labor 114)。同論文内でレイバーは、犬を主人公とした 3 作『野性』、『白い牙』、『バタール』 (“Batârd,” 1902) を比較検討し、『野性』を他の 2 作より高く評価している。「皮肉」という言葉から読み取れるのは、ロンドンが書いた別のジャンルの作品も読まれるべきだというレイバーの示唆である。

本論は、レイバーの考えに異議を唱える立場にある。つまり、彼が比較した 3 つの作品がどれも読まれるべきものであることを主張したい。そのために各作品の関連性、特に『野性』が「バタール」の「姉妹作 (a companion)」であることを提示する。そして、「バタール」と関係づけることによって可能となる『野性』の新しい解釈について論じたい。

1. 『野性の呼び声』と『白い牙』

『野性』は出版直後から爆発的な売り上げを見せ、⁶⁾ 以降アメリカのみならず、現在まで世界各国で読者を獲得している。⁷⁾ 『白い牙』の広い受容は、このように人気のある『野性』と舞台およびキャラクター設定に共通点が多いことが関係している。この相互関係が影響しているせいか、両方あるいは一方が未読である読者の中には、2 つの長編が連作だという印象もあるようだ。しかし、実際のところ、2 作は連続性のない、個々の物語として書かれたものである。ただし、プロットについては関連があり、両作を一読すれば、それぞれは物語を逆方向に展開した対称的

な構造を持っていることがすぐに認められる。このような展開の逆転は、ロンドンが意図的に試みた手法である。彼は『野性』を出版したマクミラン社の編集者、ジョージ・P・ブレット（George P. Brett）に宛てた手紙の中で、『白い牙』の創作動機について次のように語っている。

.... I have the idea for the next book I shall write—along the first part of next year.

Not a sequel to *Call of the Wild*.

But a companion to " " " " .

I'm going to reverse the process.

Instead of the devolution or decivilization of a dog, I'm going to give the evolution, the civilization of a dog.—development of domesticity, faithfulness, love, morality, & all the amenities & virtues.

And it will be a *proper* companion-book—in the same style, grasp, concrete way.

Have already mapped part of it out. A complete antithesis to the *Call of the Wild*.

(London, *The Letters of Jack London*⁸⁾ 454–55 ; 下線筆者)

ロンドンは『野性』の「姉妹作」となるような、『野性』の「進行をひっくり返す」ことを試みた新作に取りかかろうとしていた。この新作がのちに『白い牙』となる作品である。

確かに、ロンドンの試みは成功しているようである。物語が開始した時点での『野性』の主人公のバックは、温暖なカリフォルニア州のサンタクララ・ヴァレーに居を構えた裕福な一家、ミラー判事の屋敷で悠々と暮らしている。判事の屋敷には、庭師の下働きとして雇われていたマヌエルという男がいた。ギャンブルにはまってしまい金の必要に迫られた彼は、その年に世間を賑わせたカナダのユーコン準州クロンダイク地方でのゴールド・ラッシュにより生じた犬の需要を利用して、判事の許可を得ずにバックを売ってしまう。これをきっかけに、彼の極寒地域での生活が始まる。バックは橇犬として働き、異なるタイプの主人たちを転々としながら、やがて人間の手を離れ、最後には野生の狼の群れの一員となる。一方の『白い牙』の主人公は、野生の狼と狼犬のあいだに生まれたホワイト・ファングである。ホワイト・ファングは始めのうち、生まれたほら穴で母親と暮らし、少し成長したのち外の世界に出る。そして、狩りなどの生きる術を覚えながら、野生の動物としての経験を積み、やがてインディアン飼いの犬となる。この次に冷酷なビューティー・スミスのもとで闘犬となり、激しい闘いの最中で死に直面したところを、最後の主人となるスコットに救われる。最終的には、この主人の故郷であるカリフォルニア州シエラ・ビスタにあるスコット判事邸で、愛情を注がれながら暮らすことになり、物語は閉じられる。『白い牙』は、温暖なカリフォルニアの裕福な家庭からカナダ

の北部地域の森に至るという『野性』の展開をちょうど反対にした物語となっており、ロンドンが意図した通りの姉妹作として完成していることがわかる。

2. 「バタール」と『野性の呼び声』

ロンドンがおこなった、自身の作品の姉妹作を創作しようという試みは、『白い牙』の執筆が最初だとは言い切れない。『白い牙』の元となった『野性』の執筆経緯について、彼は友人のアナ・ストランスキー（Anna Strunsky）に送った手紙で次のように説明をしている。

You found him [George P. Brett] reading the manuscript of what was probably my dog story. I started it as a companion to my other dog-story “Bâtard,” which you may remember; but it got away from me, & instead of 4000 words it ran 32000 before I could call a halt. I hope you will like it when it appears. (London, *Letters* 352 ; 下線筆者)

『白い牙』の執筆で試みたのと同様に、ロンドンは『野性』を、短編「バタール」の「姉妹作」となることを目指して書き始めている。ところが『白い牙』について語った手紙と違うのは、この手紙が『野性』が完成してから書かれているという点である。一見この文面は、『野性』が当初の予定に反して「バタール」の姉妹作にはなり得なかったことを伝えているように思える。だが、それは分量においてのみである。内容において両作が姉妹作となったかどうかについて、ロンドンは述べてはおらず、その判断は読者に委ねられている。これに関して、レイバーがひとつの解答を提示している。彼は、両作に『白い牙』を加えた議論の中で、犬が登場するという共通性はあるものの、「このような表面的な一般化を超えたところでは、3作は大きく異なった物語」（“[b]eyond this glib generalization, however, they are very different stories”）だと評し、「バタール」と『野性』の違いを強調している（Labor 116）。この見解に立脚すれば、『野性』が「バタール」の姉妹作だとは断言しにくい。確かに「バタール」は、同じ『野性』の姉妹作として書き始められたという事実にもかかわらず、『白牙』のように多数の読者を獲得してこなかった。このように作品の受容を考えても、『野性』と「バタール」のあいだに大きな差異があるという考えは説得的である。

しかしながら、「バタール」と『野性』が姉妹作ではないとは必ずしも言い切ることはできない。両作を子細に読めば、関連のある要素が残されていることがわかるからだ。そのひとつとして、『野性』と『白い牙』で用いられていた、プロットの対称性をあげてみたい。次の文章は「バタール」の冒頭からの引用である。ここ

では、主要キャラクターである主人のルクレールと犬のバトルが初めて対面したときの様子が描かれている。

The first time they met, Bâtard was a part-grown puppy, lean and hungry, with bitter eyes; and they met with snap and snarl, and wicked looks, for Leclère's upper lip had a wolfish way of lifting and showing the white, cruel teeth. And it lifted then, and his eyes glinted viciously, as he reached for Bâtard and dragged him out from the squirming litter. It was certain that they divined each other, for on the instant Bâtard had buried his puppy fangs in Leclère's hand, and Leclère, thumb and finger, was coolly choking his young life out of him. (London, *The Call of the Wild, White Fang and Other Stories*⁹⁾ 21)

ルクレールとバトルは出会った瞬間からお互いを攻撃し合い、これ以降、同様の暴力が物語を通して何度も描かれることになる。このような物語の性格から、レイバーは「バトル」を「憎しみの解剖書」(“anatomy of hatred”)と評している(Labor 116)。ルクレールは、買い取った犬の父親がはっきりとしていないことを知り、犬に「私生児」を意味するバトルという名前をつける。また、バトルはそのふるまいの悪さから、語り手には「悪魔」(“a devil”)と、周囲の人間からは「地獄の子」(“Hell's Spawn”)と呼ばれている(21)。レイバーは、バトルを「人間の最良の友として考えられる全てと対極にあるもの」(“the antithesis of everything that man's best friend is supposed to be”)としているが、このような不名誉な呼び名を考えれば、この評価は適切だと言えるだろう(Labor 116)。そして、バトルと対極の関係にある「最良の友」にふさわしいのが、『野性』の主人公のバックである。前述したように、『野性』の冒頭でバックは、カリフォルニアの裕福な家庭で恵まれた生活を送っている。バックには、セント・バーナードの父親がいた。その父親は生前、「判事にとっては、つねに影身に添うて離れぬ伴侶」¹⁰⁾(“the Judge's inseparable companion”)であり、バックは「その父の後釜にすわるという形勢が大だった」(“bid fair to follow in the way of his father”)ことから、判事とバックが良好な信頼関係にあったことがわかる(44)。ミラー判事邸でのバックは、「人間をも含めて、ミラー判事の屋敷内で生きるすべての歩くもの、這うもの、飛ぶものの上に君臨する王」(“king over all creeping, crawling, flying things of Judge Miller's place, humans included”)であった(44)。これは、彼が主人に最も近い存在だったということを示しているのだろう。このように、「バトル」と『野性』は、物語が始まった時点において、舞台と主人公の性格や立場という観点から判断すれば、対称的な物語だと言える。最初に引用した手紙に下線で示したように、ロンドンは『白い牙』が「『野性』と完全に対極にあるもの」になると述べている。

実現したこの対極な関係は、冒頭に関する限りにおいて「バトル」と『野性』にも共通している。よって、「バトル」が『野性』の姉妹作である可能性を完全に否定することは難しいだろう。

さらには、両作には類似した場面が描かれているということからも、その関連の高さがうかがえる。「バトル」では、ルクレールがしきりにバトルに暴力を振るう。このようなひどい扱いを受けながらも、バトルは決してルクレールから離れようとししない。この様子を見た周囲の人間は不思議に思う。しかし、ルクレールだけはバトルの気持ちを読み取り、彼が逃げ出さない理由を知っていた。次の引用では、ルクレールがなぜバトルの心の内を理解できたかが説明されている。

He was a man who lived much in the open, beyond the sound of human tongue, and he had learned the voices of wind and storm, the sigh of night, the whisper of dawn, the clash of day. In a dim way he could hear the green things growing, the running of the sap, the bursting of the bud. And he knew the subtle speech of the things that moved, of the rabbit in the snare, the moody raven beating the air with hollow wing, the baldface shuffling under the moon, the wolf like a grey shadow gliding betwixt the twilight and the dark. (25 ; 下線筆者)

ルクレールは自然の中で暮らすうちに「風や嵐の声、夜のため息、夜明けのささやき」や「動くものたちのかすかな話」を理解する能力を習得していた。「声」「ため息」「ささやき」「話」という言葉は、人間以外の生物に対して用いられることは稀である。ここでこのような表現が用いられているのは、人間が言葉を理解するのと同程度の鮮明さで、ルクレールが自然から情報を得ることができるということを示すためである。自然の事物や動植物から情報を明確に読み取る力によって、ルクレールはバトルの心理を把握することができたのである。『野性』においても、同様の表現によって、バックが情報を得る様子が描かれている。この表現が登場するのは、物語の終盤にあたる、バックがジョン・ソーントン (John Thornton) を主人としていたときである。森の中へと出かけていたバックは巨大なムースの群れに遭遇し、そのリーダーに勝負をしかける。ムースとの闘いの最中、バックは「ある変化が周囲のものの上に生じ始めている」(“a change was coming over the face of things”) ことに気付く(134)。彼はその変化が「他にも生き物がここに入りこんでこうとしている」(“other kinds of life were coming in”) ことだと理解した。それ以上のことを追求することは、目の前のムースとの勝負の決着が着くまで、ひとまず保留することにした。その4日後、勝利をおさめたバックは、ムースの肉を食べ終わるとすぐに、ソーントンのキャンプへと駆け出す。

As he held on he became more and more conscious of the new stir in the land. There was life abroad in it different from the life which had been there throughout the summer. No longer was this fact borne in upon him in some subtle, mysterious way. The birds talked of it, the squirrels chattered about it, the very breeze whispered of it. (134 ; 下線筆者)

キャンプに近づくにつれて、以前に感じた変化がはっきりとバックに伝わってくる。そして、その変化はやがて「鳥たちが話題にし、栗鼠もしゃべりたて、そよ風さえもがささやきかけ」るほどはっきりとバックに伝えられる。この記述は、ルクレールが理解することのできた「風や嵐の声、夜のため息、夜明けのささやき」や「動くものたちのかすかな話」と類似している。類似した表現により、どちらの作品においても、自然現象や生物がまるで人間が言語によって行うかのように情報を鮮明に伝達するさまが描かれている。

レイバーは、ロンドンが『野性』を「バタール」で「誇張して表現された邪悪なイヌ科のイメージからその種の名誉を取り戻すために」（“in order to redeem the species from the diabolical canine image dramatized”）執筆したとして、『野性』が「バタール」と全く異なる作品であることを主張する（Labor 117）。ところが、上記のような類似した記述は、レイバーの考えに疑問を抱かせる。両作は共通する要素を補完的に扱っているという可能性があるからである。つまり、短編「バタール」では部分的にしか書ききれなかったものを、長編『野性』で詳述しているのだという見方もできるはずである。

3. バックの視覚・聴覚・嗅覚の発達

自然の事象や生物から情報を得る特質について、ロndonは「バタール」の中で詳しく述べなかった。その特質をルクレールがどのような過程で獲得したのか、あるいはそれがどのように機能しているのかは、明確には語られてはいない。一方の『野性』には、のちに風や鳥たちによって明確に伝えられる「ある変化」が、「視覚ではなく、あるいは聴覚でも、嗅覚でもなく、何か別の、もっと微妙な感覚」（“not by sight, or sound, or smell, but by some other and subtler sense”）によってもたらされたと説明されている。つまり、自然事象や動植物から得る情報は、通常感覚器官を越えたところで受け取られるということである。ここで視覚・聴覚・嗅覚について言及があるのは、一般に犬が情報を得る時にこの3つの感覚が重要な働きをするからだという理由だけではない。これらの感覚は、バックがクロンダイク地方での経験の中で大きく発達させたものだからでもある。この感覚の成長を記述するにあたって、まずはバックの発達について概観してみたい。

ミラー判事邸からクロンダイクへと連れられたバックは、過酷な環境で生き残る

ために、それまでの習慣を一変させる必要に迫られる。第一に求められたのは、クロンダイクの環境への適応である。北部地方では「棍棒と牙の掟」(“the law of club and fang”)を身に付けなかった者はすぐに命を落とす。以前のバックは、温暖なカリフォルニアの「愛と友情の掟」(“the law of the love and fellowship”)つまり「私有物や個人の感情といったものを尊重する」(“respect private property and personal feelings”)ことを良しとする世界の住人だった(63)。そのような南部出身の犬は、北部においては「様に軟弱で、櫓引きの苦勞から、寒さから、あるいは飢えから、ばたばたと死ぬ」(“all too soft, dying under the toil, the frost, and starvation”)ために生き残ることができない(72)。カーリーの死がそのいい例だろう。彼女は、バックとともに北部へと連れられたニューファウンドランド犬であるが、南部での掟に従い親しみを持ってハスキー犬に近づいたために、あっという間に殺されることになる。このような北部の過酷な環境をバックは生き延びることができた。それはひとえに彼の適応能力の高さが可能にしたものである。その例として、食事への適応をあげたい。北部地方の櫓犬たちは、1日にたった1ポンドの食べ物しか与えられない。そのため、それまで空腹で困ることのない環境にいたバックにはとても耐えられず、盗むことを覚えざるを得なかった。主人のペロー(Perrault)からベーコンを奪ったバックの生涯で最初の盗みは、「<北方地域>のきびしい環境のなかで生き抜いてゆくにあたり、バックが適性をそなえていることを示す」(“marked Buck as fit to survive in the hostile Northland environment”)出来事になった(62)。バックは南部の掟で何よりも尊重されていた道徳心を捨て去ったのである。その結果として、「文明からの逸脱の完了が、徳義を遵守する態度を放棄し、それによってわが身を護ることができるという事実によって証拠立てられた」(“[T]he completeness of his decivilization was now evidenced by his ability to flee from the defence of a moral consideration and so save his hide”)のである(63)。このように、バックは見事に北部に適応する。

次にバックに訪れたのは、犬という種族の意識の目覚めである。ペローを主人としてたどり着いたドーソンで、バックは多くの犬たちが働く姿を目にする。犬たちは一様にバックと同じ南の出身だったが、その大半は野生の狼の血をひくハスキー犬だった。ハスキーたちは、毎晩決まった時刻に一斉に遠吠えを始める。遠吠えは「夜の歌」(“a nocturnal song”)と表され、この歌は「犬という種族そのものとおなじだけ古い歌」(“an old song, old as the breed itself—one of the first songs of the younger world”)だと語られる(74)。バックはセント・バーナードとスコッチ・シェパードの子であるため、同じ犬であるが種としてはハスキーとは異なる。バックがこの歌に参加することで感じた喜びは、彼がハスキーたちと種は違っているが犬という種族としては共通していることを示している。またハスキーの歌は、バックを喜ばせると同時に、感動させてもいた。そして、「彼がそれに感動したということは、彼の先祖返りがどれだけ完全なものだったかを示している」(“that he

should be stirred by it marked the completeness with which he harked back”) と、バックが種族への回帰を経験したことが記述される (74)。南方での暮らしでは気づくことのなかった、自身の種族としての意識がここで目覚めたと言える。

これまでに述べた新しい慣習とアイデンティティの獲得は、言うなれば、バックが起こった内的な変化である。内的な変化と同時に、北方の厳しい環境は、外的な身体の変化も進行させる。樺犬としての労働により、バックの肉体は鉄のように硬くなり、痛みが強くなる。内臓は食料の少なさに適応して、どんな食べ物であっても消化し、栄養素を細胞の隅々にまで運ぶことができるようになる。身体の発達は、このような筋肉や臓器といった大きな部分だけに及んだのではない。次の引用に見られるように、体の変化は、より微細な、感覚器官にまで及ぶのである。

Sight and scent became remarkably keen, while his hearing developed such acuteness that in his sleep he heard the faintest sound and knew whether it heralded peace or peril.... His most conspicuous trait was an ability to scent the wind and forecast it a night in advance. No matter how breathless the air when he dug his nest by tree or bank, the wind that later blew inevitably found him to leeward, sheltered and snug.
(64 ; 下線筆者)

ここで発達した視覚・嗅覚・聴覚の3つの感覚は、前述のムースとの闘いの中でバックが感知した「ある変化」を捉えることができなかった感覚である。鋭く進化した感覚でさえ知覚できない変化について考察する場合、その感覚器官が一体どの程度の感受性を持っているのかを正確に知っておくべきだろう。引用では後半部分に、発達した嗅覚についてその働きが詳述されているが、視覚と聴覚については具体的な記述が見られない。そこで、次に発達した視覚と聴覚の具体的な作用を物語の順を追いながら見ていきたい。

ソーントンに出会う以前のバックは、ハル (Hal)、チャールズ (Charles)、そしてハルの姉でありチャールズの妻であるマーセデス (Mercedes) から成る一行の樺犬だった。彼らは北部に必要な知識を全く持ちあわせていなかった。樺犬の数が多ければ多いほど前進できると考えて次々と犬を買い、そのために必要な食料が増えることには全く考えが及ばない。犬樺が思うように進まないのは犬たちの空腹のせいだと考え、食料不足にもかかわらず、どんどん犬たちに食べ物を与え、ついには食料が尽きてしまう。過労に空腹が重なった結果、チームの犬たちは1匹、また1匹と死んでいく。そのような苦境の中にいるバックを救ったのがソーントンだった。その後、バックはハルたちから離れ、ソーントンのキャンプで過ごす。春の過ごしやすい環境の中で、彼は徐々に疲労と怪我から回復していく。理想的な主人とともに生活をしながら、バックはミラー判事に対しても感じたことのなかった愛情

をソーントンに対して抱くようになる。ソーントンを主人とする生活の中で、バックは3度ソーントンを救った。バーで起こった喧嘩を仲裁しようとしたソーントんに危害が加えられると、バックは加害者の喉元を噛みちぎって報復する。ソーントンが急流に飲み込まれたときは必死に泳いで救出する。無謀な賭けに挑戦したソーントンのために、1000ポンドの小麦粉が積まれた櫓を引き、16000ドルの大金を勝ち取る。このように主人に愛を示す一方で、バックは野生での生活を望むようになる。ここで、鋭敏になったバックの視覚と聴覚が詳述される。

聴覚の発達に関して言えば、この小説のタイトルは示唆的である。『野性の呼び声』の「呼び声」（“the call”）は聴覚の発達の表れだと考えることができるからである。物語の前半では聞こえなかった呼び声が、ソーントンを主人に迎えてからのバックには、何度も聞こえるようになる。おそらく呼び声は、上記の引用で下線を付したように、バックの中で呼び覚まされた種族の先祖たちが「森のなかの野生の生き物がたてる音をバックに教える」ことによって聞こえ始めたのだろう。次に引用するように、先祖たちがバックを強く魅了することで呼び声は聞こえ始めている。

So peremptorily did these shades beckon him, that each day mankind and the claims of mankind slipped farther from him. Deep in the forest a call was sounding, and as often as he heard this call, mysteriously thrilling and luring, he felt compelled to turn his back upon the fire and the beaten earth around it, and to plunge into the forest, and on and on, he knew not where or why; nor did he wonder where and why, the call sounding imperiously, deep in the forest. (111)

先の引用にあったように、嗅覚の発達によってバックは、風のおいさを嗅ぐことで風の当たらない場所にねぐらを掘ることができるようになった。同様に、聴覚の進化によってバックは呼び声を聞くことが可能になったと、ここで具体的に説明されている。

次に、視覚の発達の例をあげたい。ソーントンたちは、バックが賭けで稼いだお金を資金にして未知の土地への冒険を続け、未開の金鉱を見つけ出す。そこで、彼らは採掘に夢中になり、犬たちは手持ち無沙汰になってしまう。バックはぼんやりと火を見つめることで、そのような退屈な時間をやり過ごしていた。この時しばしば彼の目に映るのが、「脚の短い、毛深い男の幻」（“the vision of the short-legged hairy man”）である。発達した聴覚が呼び声を捉えるようになったのと同様に、この男を見ることができるようになったのが、視覚の発達の表れだと考えられる。しかし、定冠詞が付いていることからわかるように、この男が現れたのはこの時が初めてではない。ペローの次に主人となった「スコットランド人との混血の男」

（“the Scotch half-breed”）のもとで樫引きをしている際にも一度、バックはこの男の幻を見ている。その際のバックはこの男の観察者であるのみだったが、今回は変化が生じている。この時のバックは男を見るだけではなく、「その男と一緒に、記憶によみがえったあのもうひとつの世界をさまよいて過ごし」（“wandered with him in that other world which he remembered”）さえしているのだ（125）。この記述は、バックが観察者の立場を超えて、幻の中でより具体的な行動をとっていることを示す。この変化は、視覚が以前より鋭敏になっていること表しているのだろう。男と共に行動している姿を描いた次の引用が、さらなる説明となっている。

Through the forest they crept noiselessly, Buck at the hairy man's heels; and they were alert and vigilant, the pair of them, ears twitching and moving and nostrils quivering, for the man heard and smelled as keenly as Buck. （125；下線筆者）

幻の中のバックの「耳は絶えずぴくぴくしているし、鼻腔もひくひく震えている」ことから、聴覚と嗅覚が働いていることがわかる。ここでは、視覚の働きに加えて聴覚と嗅覚が副次的に働くような、複雑な感覚の作用が描写されているのである。これは、バックの視覚の発達を子細に示している例だと言える。

実は、このような複合的な感覚の働きは、聴覚に対しても作用している。次の引用は、バックが二度目の呼び声を聞く場面である。

It [the call] filled him with a great unrest and strange desires. It caused him to feel vague, sweet gladness, and he was aware of wild yearnings and stirrings for he knew not what. Sometimes he pursued the call into the forest, looking for it as though it were a tangible thing, barking softly or defiantly, as the mood might dictate. He would thrust his nose into the cool wood moss, or into the black soil where long grasses grew, and snort with joy at the fat earth smells; or he would crouch for hours, as if in concealment, behind fungus-covered trunks of fallen trees, wide-eyed and wide-eared to all that moved and sounded about him. It might be, lying thus that he hoped to surprise this call he could not understand. （125；下線筆者）

呼び声によって自身の中の野性を刺激されたバックは、周辺のにおいを嗅いで喜び、目と耳を使って周囲の物に注意を向ける。ここでも視覚・聴覚・嗅覚が複合的に働いている様子が描かれている。視覚に対しては「脚の短い、毛深い男の幻」が、聴覚に対しては「呼び声」がバックの感覚の発達の具体的な例として描写されている。また、視覚・聴覚・嗅覚の鋭さは、それが単独で機能するのではなく、複合的に働

くことによって示されているのである。

4. 五感を超えて森を読む

バックの視覚と聴覚がいかに発達しているかについては、他の動物との比較によって相対的に示されてもいる。野性が目覚めて血に飢えたバックはあるハスキー犬と格闘をするが、その際に視覚と聴覚が鋭く機能している。

To sights and sounds and events which required action, he responded with lightning-like rapidity. Quickly as a husky dog could leap to defend from attack or to attack, he could leap twice as quickly. He saw the movement, or heard sound, and responded in less time than another dog required to compass the mere seeing or hearing. (130 ; 下線筆者)

バックは相手の2倍にも及ぶ目と耳の感度の高さを駆使して、あっという間にハスキーを倒してしまう。この闘いを皮切りに、バックはライチョウ、ウサギ、シマリス、魚など、次々と動物を殺していく。この流れの中でバックは、これまで何度も言及したムースに遭遇するのである。そしてムースとの格闘中に、「視覚ではなく、あるいは聴覚でも、嗅覚でもなく、何か別の、もっと微妙な感覚」によって「ある変化」を感じることになる。変化の発端へとバックが近づくと、変化について「鳥たちが話題にし、栗鼠もしゃべりたて、そよ風さえもがささやきかけ」る。これまで追ってきた、十分に発達した3つの感覚では捉えきれない変化を知覚させた「微妙な感覚」はなぜ生き物の声を聞くことを可能にさせたのだろうか。

それは「ある変化」を得たこの新しい感覚によって、バックは「読む」(read)ことが可能になったからだと考えることはできないだろうか。ソーントンのキャンプに近づくバックは、周囲にある事物から「メッセージを読みとるや、いっそう足を速めて、飛ぶように駆けだして行った」(“reading a message which made him leap on with greater speed”)と、バックの読む能力を示す記述がある(134)。同時に、バックが注意を向けていた周囲の事物は「あるひとつの出来事を、最後のぎりぎりの寸前まで物語っている、あまたの細部」(“the multitudinous details which told a story—all but the end”)と記述されていることから、それらがバックに読まれる物語となっていることがわかる(134)。発達して統合された視覚・聴覚・嗅覚はやがて新しい「微妙な感覚」を生み、バックに読む力を与えたのだと考えることは不可能ではない。このように考えれば、以下に引用するように、この小説が冒頭からバックの読む能力について語っている事実は、注目に値するだろう。

Buck did not read the newspapers, or he would have known that trouble was brewing, not alone for himself, but for every tide-water dog, strong of muscle and with warm, long hair, from Puget Sound to San Diego. Because men, groping in the Arctic darkness, had found a yellow metal, and because steamship and transportation companies were booming the find, thousands of men were rushing into the Northland. These men wanted dogs, and the dogs they wanted were heavy dogs, with strong muscles by which to toil, and furry coats to protect them from the frost. (43)

バックがクロンダイクへと連れて行かれることになったのは、彼が新聞を読むことができなかったからである。つまり、読む力の欠如がバックの運命を決めることになったのだと言い換えることができる。そして、バックが感覚を発達させて、最後には周囲の自然事象や動植物といった森を読む力を身につけた。このように考えれば、『野性』の物語は、バックが読む能力を獲得する物語だという新たな解釈ができるのである。とはいえ、犬であるバックは文字を解読することはできないため、厳密な意味で「読む」ことは不可能である。そこでロンドンが、北部での経験の中で感覚器官を可能な限り鋭敏にし、その果てに、犬に実現可能な範囲で読む力をバックに与えようと試みたのではないだろうか。

おわりに

従来の研究においては、『野性』の姉妹作として考えられてきたのは『白い牙』のみであった。しかし、「バタール」のルクレールと『野性』のバックはともに、風などの自然事象や鳥などの生物によって情報を得ることができるという共通点を有していた。この点に着目することで、ロンドンが「バタール」で部分的に提示した内容を『野性』で具体的に説明していることが明らかになった。両作は、物語冒頭の対称性のみにおいてのみ関連するのではなく細部においても関連し合う、『野性』と『白い牙』に劣ることのない姉妹作だったのである。この考察の意義は、2作を関連させることによって、これまでほとんど論じられることのなかった「バタール」の作品としての価値を見直し、『野性』を新たな観点から読み直したことにあるだろう。

『野性』を読み直すことで、ルクレールには自然から情報を読み取る能力があることが明らかになった。この考察結果が「バタール」に一体どのように還元されるのだろうか。作中では、ルクレールが「完全な動物」（“perfect animal”）だと述べられているが、これがなぜかは明確な説明がなされていなかった（26）。ルクレールに、どんな動物にも勝るバックと同じように読むことができるとすれば、彼が「完全な動物」であることに少しは説明がつく。また、本論での考察は『野性』にも示唆を与えている。バックが知覚した「ある変化」は、イーハット族（“the

Yeehats”）の到来だということが最終的には明らかとなる。イーハット族によって、愛するソーントンが殺されたことを知ったバックは怒り狂い、彼らを次々と殺していく。バックは、従来ならば人間に固有のものである考えられてきた読む行為を犬が実現可能な範囲で獲得し、「棍棒と牙の掟」の下では決して勝てることのない人間に勝利した。バックが読む力を獲得する『野性』の執筆は、人間と動物のあいだに定着していた固定観念や上下関係に疑問を投げかける、ジャック・ロンドンの野心的な試みだったと考えることも可能だろう。

注

¹⁾ 以下、『野性』と略記する。

²⁾ 日本における出版状況がこれを明確に示している。ロンドンは 20 作ほどの長編を残しているが、本国で出版された翻訳作品は、その半数にも満たない。また、現在ではそのほとんどが絶版となっており、入手しやすい文庫として書店に並んでいるのは、『野性』と『白い牙』のみである。またこの 2 作の文庫は、岩波・新潮・光文社など複数の出版社から出版されていることも、作品の知名度の高さの表れだと言えるだろう。

³⁾ 1902 年から 1908 年のあいだに集中して書かれている。この種の作品は、ロンドンが残した 20 以上の長編のうち『野性』と『白い牙』のみであり、200 以上の短編の中では 5 作に限られる。その 5 作のタイトル及び初出は以下の通り。“Bâtard,” *The Cosmopolitan*, 33 (June 1902); “Moon-Face,” *The Argonaut*, 51 (July 21, 1902); “Brown Wolf,” *Everybody’s Magazine*, 15 (August 1906); “That Spot,” *Sunset Magazine*, 20 (February 1908); and “To Build a Fire,” *The Century Magazine*, 76 (August 1908).

⁴⁾ 『野性』の国内外での売り上げは、版權が及ぶ範囲内だけでも 1000 万部を超えている (Tavernier-Courbin 23)。

⁵⁾ ロンドンの作品の中では『野性』においてのみ、作品単体を扱った研究書が出版されている。たとえば、Earl J. Wilcox, ed. *The Call of the Wild: Complete Text with Introduction, Historical Contexts, Critical Essays* (New York: Houghton Mifflin Company, 2004) など。

⁶⁾ 出版社の宣伝効果もあって、発売当日に初版の 1 万部が売り切れてしまうほどの人気だった (Tavernier-Courbin 24)。

⁷⁾ 1975 年のウッドブリッジ (Woodbridge) の報告によれば、『野性』を中心としたロンドンの翻訳作品は、1975 年の時点ですでに 68 ヶ国語で出版されていた。以降もその数は伸び続け、現在ロンドンの作品は、86 ヶ国語に翻訳されている (Tavernier-Courbin 28)。

⁸⁾ 以下、*Letters* と略記する。

⁹⁾ 以下、この著作からの引用はページ数のみを記す。

¹⁰⁾ 訳語での引用は深町眞理子訳『野性の呼び声』（光文社、2007 年）から該当箇所を参照し、必要に応じて一部改変しながら使用させていただいた。以降の『野性』からの引用も同様である。なお、未訳作品であるため「バトル」からの引用の訳語は、拙訳を用いている。

参考文献

- Labor, Earle. “Jack London’s *Mondo Cane*: ‘Bâtard,’ *The Call of the Wild* and *White Fang*.” *Critical Essays on Jack London*. Ed. Jacqueline Tavernier-Courbin. Boston: G. K. Hall, 1983. 114–30. Print.
- London, Jack. *The Call of the Wild, White Fang and Other Stories*. New York: Penguin, 1981. Print.
- . *The Letters of Jack London*. Eds. Earle Labor, Robert C. Letiz, III and I. Milo Shepard. 3 vols. Stanford: Stanford UP, 1988. Print.
- Reesman, Jeanne Campbell. *Critical Companion to Jack London: A Literary Reference to His Life and Work*. New York: Facts On File, 2011. Print
- Tavernier-Courbin, Jacqueline. *The Call of the Wild: A Naturalistic Romance*. New York: Twayne, 1994. Print.
- Wilcox, Earl J. ed. *The Call of the Wild: Complete Text with Introduction, Historical Contexts, Critical Essays*. New York: Houghton Mifflin Company, 2004. Print.
- Woodbridge, Hensley C. “Into What Languages Has London Been Translated.” *Jack London Newsletter* 8 (1975): 84-93. Print.
- ロンドン、ジャック 『白い牙』 深町眞理子訳、光文社、2009 年。
- ロンドン、ジャック 『野性の呼び声』 深町眞理子訳、光文社、2007 年。

Reading a Forest beyond the Five Senses: Rereading *The Call of the Wild* as a Companion to “Bâtard”

KOIZUMI Yoshiki

Summary: Jack London started working on *The Call of the Wild* as a companion story to “Bâtard.” London had said that *The Call of the Wild* turned out to be much longer a work than he had expected to write. As such, it does not come as a surprise that critics have not regarded “Bâtard” as its companion story. However, I argue that “Bâtard” is a companion work to *The Call of the Wild*. The two works have several points in common. The most obvious one is that both Leclère in “Bâtard” and Buck in *The Call of the Wild* possess the ability to gather “information” through elements in a forest much like how we do with language. Though London did not explicitly explain the process through which Leclère acquired this ability, as well as the extent to which it works. I argue that these are in fact implied in *The Call of the Wild*. This paper attempts to elucidate Leclère’s characteristics as well as retrace Buck’s adventures from a new perspective. Through a rereading of this novel as a companion story to “Bâtard,” I claim that we can understand these two works at a more profound level.